

オンライン展示

閲覧にあたつてのご注意

- ・当オンライン展示コンテンツの著作権は当館に帰属します。当館に無断で転載、二次利用することを禁じます。
- ・ご利用になりたい場合は当館までお問い合わせください。
- ・著作権等の関係により、実会場でのみご紹介している实物資料や、実会場の展示パネルにのみ掲載する写真があります。

第四章

本土決戦準備

1945年

1. 登戸研究所の疎開

1945年3月に気球製造は終了します。そして空襲が激しくなり水素など原材料供給が滞ったことに加え、春を迎える偏西風が弱まったため、4月20日が最後の放球となりました。天長節（昭和天皇誕生日）4月29日に風船爆弾の功績を称える「陸軍技術有功章」が登戸研究所へ贈られ、風船爆弾作戦は終了となりました。同日、篠田所長が所員らを集め、言葉につまり涙ながらに戦況の厳しさを伝えたという記録が残っています（展示資料）。これをみた所員らは所長は敗戦を覚悟したと感じたとのことです。そしてこの時をもって登戸研究所は長野県を中心に疎開をすることとなります。

登戸研究所の疎開は1944年末から検討されており、1945年4月までに各科の疎開先が決定していました。実は1944年7月のサイパン島陥落時点から日本軍では本土決戦準備を進めており、大本営を東京から長野県松代へ移転させる準備も着々と進んでいました。登戸研究所の長野県への疎開も、その計画の一部でした。

疎開先で登戸研究所に求められたのは、本土決戦時に国民が遊撃戦で使用する手りゅう弾などの大量生産でした。そのことを参謀本部作戦部長だった宮崎周一の日記が示しています。遊撃戦は主に屋外で展開されるため、雨天でも爆弾へ点火できるよう、登戸研究所が開発した防水マッチが重要視されていたこともわかります。



登戸研究所の疎開先と業務

（2015年度登戸研究所資料館企画展パネルより）

参謀本部作戦部長 宮崎周一
「作戦秘録」1945年5月13日付

一、登戸 爆薬、焼夷剤製作状況

爆薬 一六万 九月迄三分一 手持約一万

七月初ヨリ増加、疎開伊奈〔那の誤りカ〕谷（中沢）三分二

篠山（小川）三分一

焼夷一六万 防水缶一一万 防水マッチ一〇万

（軍事史学会『宮崎周一中将日記』

錦正社、2003年より）

2. 国民義勇隊編成と『国民抗戦必携』

※ 1945年6月10日付『朝日新聞』
朝刊の見出しそり

- 敵は近い、さあ訓練だ*

1945年9月には相模湾もしくは九十九里浜から米軍が上陸してくると日本は予測していました。政府は本土決戦に備えるため2月25日に「決戦非常措置要綱」を閣議決定します。そして4月8日に「決号作戦準備要綱」が発令され、「国民抗戦及国内警備」が重要項目の一つとして挙げられます。これに基き、6月10日「義勇兵役法」を施行し(6/22公布)、15歳以上60歳未満の男性、17歳以上40歳未満の女性すべてが国民義勇隊へ編成されることになりました。さらに、米軍が本土上陸した際には国民義勇隊は軍の指揮下にはいり、国民義勇戦闘隊として老若男女問わず「一人一殺」米兵と戦うことが求められました。「決号作戦準備要綱」が発令された4月、『国民抗戦必携』が大本営陸軍部から発行されます(写真および展示資料)。全国民が本土決戦に備えられるよう、国民義勇戦闘隊としての心構えや戦う方法がイラストでわかりやすく説明されています。国民に求められた戦闘は、正規の兵器をもって戦うことではなく白兵戦と斬り込み戦です。手りゅう弾や爆弾をもって戦車に肉迫攻撃をしかける、つまり体当たり攻撃が求められたのです。

そして、使われる手りゅう弾こそ、疎開先の長野県で登戸研究所が大量生産していたものでした。地元の小学校などが爆弾製造工場として登戸研究所に接收され、通っていた子どもたちが男女問わず爆弾製造に従事しました。

(爆弾の形は)缶詰になっていて、男の子たちが雷管っていうのを付けるんですよ。で、そこ触っちゃいけません、っていう。火を点けなければ大丈夫なんですけれどもね。そこに火を点けてなんか…投げる、爆弾ってなるのよ。女の子はね、缶の中に爆弾を詰めるのね。そして上をきれいにヘラで撫でて。威力は分からないけれど、でも天竜川に行ってみんなで並んで、威力を時々試すんですよ。そうすると50mぐらい水柱が上がるもんですから。そこそこ威力があるもんなんだねってことで、みんな手を叩いて喜びましたよ。子どもだから。

小川喜美子さん 中沢国民学校高等科 疎開してきた登戸研究所に動員(1945年時満14歳・2年生)



『国民抗戦必携』表紙(信州戦争資料センター所蔵、画像同センター提供)

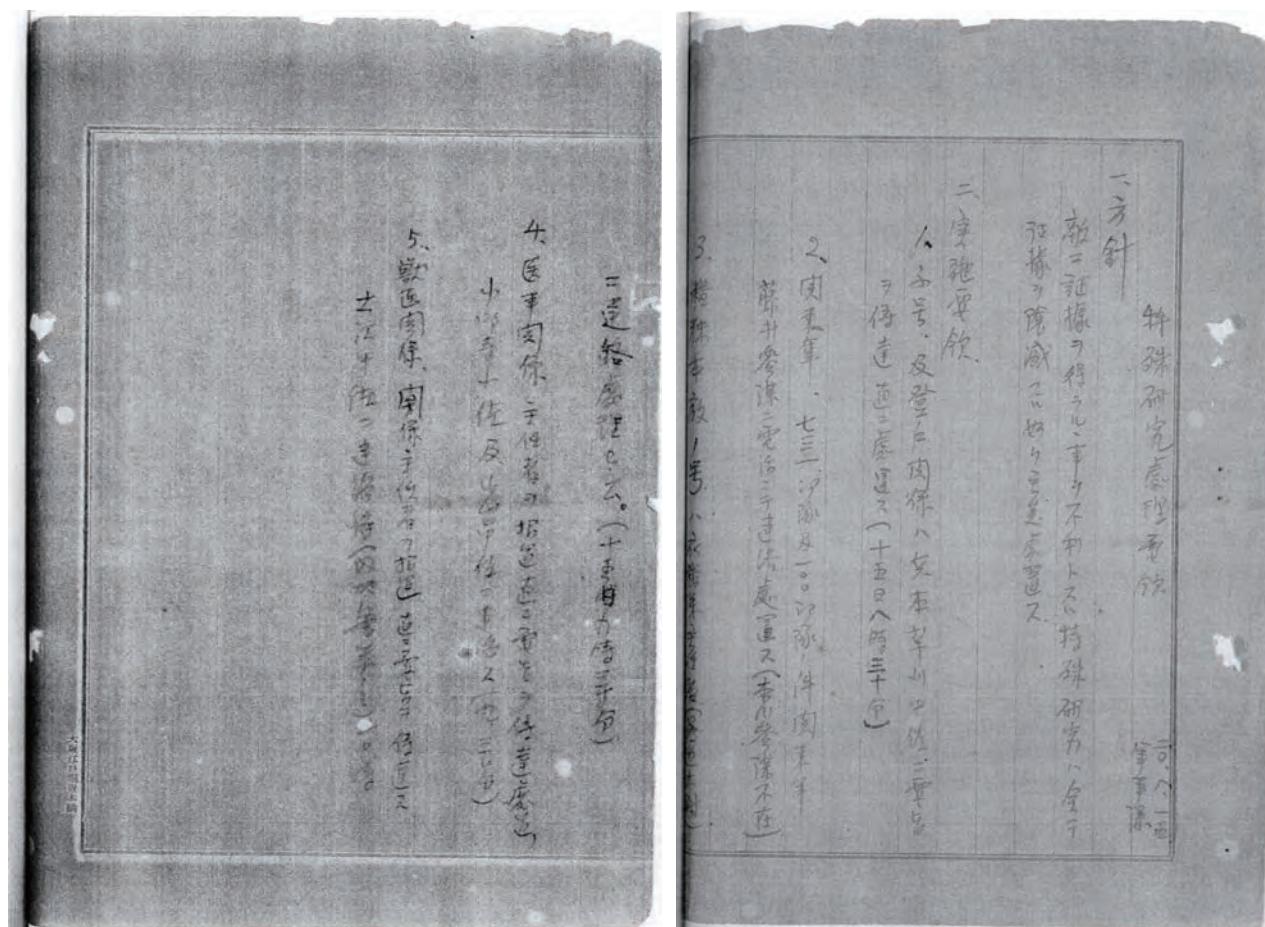


『国民抗戦必携』より戦車への体当たり攻撃のやり方(信州戦争資料センター所蔵、画像同センター提供)

3. 終戦と「特殊研究処理要領」

1945年8月15日、日本は敗戦を迎えます。敗戦が国民に知らされる以前より、登戸研究所ではあらゆる書類や機材、材料などが燃やされ、破壊され、徹底した証拠隠滅作業が行われました。その証拠隠滅を指示したことがわかる資料が「特殊研究処理要領」です。これは軍事課中佐だった新妻清一が8月15日朝、各所へ電話で指示した証拠隠滅内容をメモしたものです。その目的は「敵に証拠を得らるる事を不利とする特殊研究は全て証拠を^{マヌ}隠滅する如く至急措置す」のことでした。15日8時半に「ふ号（風船爆弾）、及登戸（研究所）関係は兵本（兵器行政本部）草刈中佐に要旨を伝達直に処置す」と命じたのを皮切りに、731部隊、100部隊、糧秣本廠へと指示していきます。糧秣本廠では種子島で黒穂病菌※を兵器化する研究を行っていました。つまり、証拠隠滅を指示した機関はすべて風船爆弾用生物化学兵器の開発機関であり、「特殊研究処理要領」は風船爆弾に生物化学兵器を搭載する計画があったことを裏付ける資料として大変重要です。国際法違反である生物化学兵器を用いた米国本土への攻撃計画があったことが米軍に知られた場合、日本軍は訴追される可能性があったため、新妻は急いで各所に証拠隠滅を命じたと考えられます。

※麦やトウモロコシなどイネ科の植物を枯らす病原菌



1945年頃の女の子たち

イラストはイメージです。
出典はこれまでの聞き取り調査でお話をいただいた内容です。

(登戸研究所が1945年5月以降、長野県に疎開した時のこと) 農家の家に5,6人いたと思いますけど。兵器班の人とか。それで田んぼのあぜ道なんてきれいなんですね。だからそれで歌を歌ったりね何かして、楽しかったです。だから全然ね、長野にいた時は戦争なんてどこでやってるかのようだ。静かでしたし。それでお仕事は、長野の事務所に入ってから何にもやりませんでした。毎日片付けでした。片づけて、書類やなんか来ますからね。棚に入れたり、大きな製図やなんかありましたのでね。そういうのを棚に入れて。それくらいのことでしたよね、お仕事としたら。

河本和子さん 登戸研究所庶務、1941年より勤務（1945年時満18歳）



戦時中なので合間には銃剣術の練習させられたりね。アメリカ人が来たら銃剣術でこう刺しなさいというので。エイ、ヤアといって。（登戸研究所内に）ちょっとした講堂があるんですよね。この講堂の中で女性だけで槍突きの練習もしたりしたんですよ。ちょっと変な話ですが、あの良いわね、なんて言っている人がみんな戦争に行っちゃう。本当にもうね、の方良いわねなんて言っているうちにみんな戦争を持ってかれちゃいました。ですから年寄りっぽいのとかね、（研究所内には）残ってましたけど。みんなで見送りしたんですよね。（自分より年齢が）下の人も志願して行ったりしている人もいましたからね。

河合こまさん 登戸研究所第三科雇員、1941年登戸研究所入職（1945年時満18歳）

ラジオがないので終戦を知ったのは翌日のこと。それがわかったとき、一度も着ることのなかった真新しいワンピースをだして着ました。薄い水色にピンクや濃い青色の小さなお花がちりばめられていてウエストがキュッとしぶってあって、ふわっと裾が広がるワンピース。近所の方から病死なさった娘さんの遺品をいただき、（娘さんは私よりも）2～3歳年上の方だったので、私がその年にならうと思って大切にしまっていたものです。それまでは母の地味な縞のモンペを着ていたので、本当に嬉しくって。やっとこの服が着られると心がぱっと花開いた思いでした。

徳田百合子さん 桜山高等女学校（1945年時満14歳・2年生）



8月14日の日に、「15日は重大なるラジオ放送があるから学校へ登校してください」という通知が来て8月15日の日に久しぶりに学校へ登校いたしました。校庭で校長先生が壇上に上がりまして、ラジオで玉音を初めて聞きました。その時に、高崎のすぐそばに堤ヶ丘っていう飛行場（前橋飛行場）があり、そこに特攻隊の隊員が出撃前で待機していたのです。隊員の人たちが校庭に低空飛行ですごいグーンってこういうふうに（急降下）して、「日本の国は負けていない。國破れて山河あり。」っていうビラを撒いた。それで私たち、はじめは玉音聞いた時も驚きましたけれど、なにがなんだか。なんでこうしたことになったのか、前後の様子も分からぬで、ただみんな肩をすり寄せて校庭で泣いたことはよく覚えています。その涙が何の涙だか、悔し涙なのか、悲しい涙なのか未だに分からぬんですけども、あの時は純粋に国が敗れたってことで泣いたんだろうと。私たちの時の教育は絶対に日本は負けないっていう教育を受けておりましたから。天皇陛下の玉音を聞いた時はただ、ただびっくり。ただ涙があふれるっていうのが実感でございました。

村田喜代子さん 群馬県立高崎高等女学校生（1945年時満16歳・4年生）

おわりに

本展では日米開戦後の1942年から1945年の敗戦までを風船爆弾を軸にみてきました。2025年には敗戦から80年を迎えます。みなさまの中には、戦争体験を直接聞いたことがないという方もいらっしゃるかもしれません。近年ウクライナ戦争や中東地域での攻撃の応酬によって「戦争」を身近に感じている方もいらっしゃるかもしれません。自分とは関係のない遠い世界のこと、むかしのこと、と感じられている方もいらっしゃるかもしれません。

戦争というと兵士が武器を手に前線に立って戦うイメージがあります。しかし戦争の時代を生きたのは兵士や軍人たちだけではありません。そこで本展では女の子たちが戦争の時代をどう生きてどう感じていたのか、という点を気球製造に動員された女の子たち、登戸研究所で働いていた女の子たちの目線を通じてみました。みなさんはどうなことを感じたでしょうか？本展が戦争の時代を少しでも「自分ごと」として捉えるきっかけになれば幸いです。



登戸研究所の人たち 1945年5月撮影
(石垣光子さん寄贈)



(左) 高知県立第一高等女学校2年生、1943年撮影 (右) 同校3年生、1944年撮影 1943年時は標準服でもスカートを履いていたのが、1944年になるとスカートも履けなくなり、モンベになったことがわかる (大川須美さん提供)

謝 辞

本展を開催するにあたり、下記の方々、機関にご協力ご後援いただきました。
ここに記して感謝の意を表します（敬称略、五十音順）。

協 力

愛媛県立川之江高等女学校卒業生

伊藤澪子 石川俊子 進藤万壽子 高橋光子 谷井恵美子

上野高等女学校卒業生 田邊浩子

群馬県立高崎高等女学校卒業生

牛込やす子 川野堂子 銀川きよ子 濑川ひさ子 原澤禮子
村田喜代子 梁瀬和江

群馬県立前橋高等女学校卒業生 内堀ヨシノ

信州戦争資料センター

精華高等実業女学校・滋賀県立高等女学校卒業生 久野孝子

仙台市民映像資料プロジェクト

高知県立第一高等女学校卒業生 大川須美

小林エリカ

楣山高等女学校卒業生 徳田百合子

日本橋高等女学校卒業生 銀川紅子

防衛省防衛研究所史料センター

富嶽を飛ばそう会

宮崎県立延岡高等女学校卒業生 寺原八千代 田代タミ子

後 援

川崎市 川崎市教育委員会